

三つ塚上・田中上

長野県上伊那郡宮田村

三つ塚上・田中上遺跡発掘調査報告書

1979

南信土地改良事務所
宮田村教育委員会

三つ塚上・田中上

長野県上伊那郡宮田村

三つ塚上・田中上遺跡発掘調査報告書

1979

南信土地改良事務所

宮田村教育委員会

序

我が宮田村は、この10年間に全村の圃場整備事業を実施した。これは農業は勿論であるが、村の政治や経済に及ぼす影響は非常に大きなものがあり、一大偉業であった。

しかし、その反面、大切なものを同時に失った。それは埋蔵文化財である。発掘調査を実施したとは雖も、建設重機の前に敢えなく消滅していった数多くの遺跡は、再び元の姿には戻らないのである。

この、三つ塚上遺跡・田中上遺跡も同様に、昭和54年度県営圃場整備事業のため、発掘による記録保存の止むなきに至り、宮田村教育委員会の編成する調査団により発掘されたものである。本書はその報告書である。幸にも報告書に見られるような新知見を得たことは、関係者等しく喜びとするところである。

この事業にご指導を賜わった長野県教育委員会をはじめ、関係各位に御礼を申し上げると共に、本書が些かなりとも斯界のお役にたてば幸である。

昭和55年 3月

宮田村教育長 林 金茂

例　　言

1. 本書は、南信土地改良事務所が計画した、宮田村圃場整備事業に伴う三つ塚上遺跡の調査報告書である。
2. 調査は南信土地改良事務所の委託により、宮田村教育委員会が調査団を編成し、実施した。発掘調査は、昭和54年7月3日より、同月15日まで残務整理を含め実施された。
3. 本報告書は契約期間内にまとめることが要求されており、調査結果の緻密な検討や研究の時間が十分にとれなかつたので、検出された遺構・遺物をできるだけ図化することに重点をおいた。
4. 資料作成では、遺構・遺物の尖端は赤羽義洋・友野良一が担当した。
5. 写真撮影は、遺構写真を小木曾清・友野良一・丸山弥生が担当し、遺物の写真は友野良一が担当した。
6. 本書の編集は友野が行った。
7. 遺物分布図中の記号の種別は各図に示してある。また、図中の番号は遺物台帳番号と同一のものを使用したが、出土した遺物すべてについてナンバリングすることはできなかった。
8. 遺物番号は、図・図版とも台帳番号と同一のものを使用し、文中でも同様である。
9. 発掘参加者は、
　調査団　友野良一・赤羽義洋・丸山弥生・小木曾清・砂場啓孝
　伊藤柳治・大沢寅・太田利雄・春日修一・春日宗・北沢武男・木下進・小田切英男・小田切房子・小松秀男・小松博子・小松二三子・白鳥あき子・墨矢勇夫・林美弥子・平沢八千子・藤川周一・保科兼雄・保科徳子・保科義重・百々沢乙平
　教育委員会事務局
　教育長　林　金茂・森下　清・古河原正治・竹松正恵・伊藤頼男

目 次

I. 遺跡の概観	5
遺跡の立地	5
地質・層序	5
II. 調査の経過	6
III. 調査の結果	7
1. 遺跡の概要	7
2. 縄文時代の遺構	9
3. 古墳時代の遺構	18
4. その他の遺構	26
IV. 所 見	26

図 1 三つ塚上遺跡の位置 (1)	図24 北ピット
図 2 層 序	図25 北ピット
図 3 三つ塚上遺跡の位置 (2)	図26 北ピット出土土器実測図
図 4 遺構の平面分布	図27 北ピット西土塁
図 5 三つ塚上遺跡	図28 北ピット東土塁
図 6 第2号住居址実測図	図29 第1号住居址実測図
図 7 土器出土状況	図30 第1号住居址
図 8 炉 址	図31 1.カマド右側遺物出土状況 2.遺物出土状況
図 9 集 石	3.カマド附近遺物出土状況 4.カマド北側遺
図10 発掘状況	物 5.柱穴 P ₂ 6.柱穴 P ₁
図11 第2号住居址出土遺物分布図	図32 第1号住居址出土土器実測図
図12 第2号住居址	図33 第1号住居址出土土器・石器実測図
図13 木炭出土状況	図34 第4号住居址実測図
図14 土偶出土状況	図35 第4号住居址カマド
図15 土偶出土状況	図36 第4号住居址
図16 石鍬出土状況	図37 第4号住居址カマド
図17 第2号住居址出土土器実測図	図38 第4号住居址柱穴
図18 第2号住居址土器拓影	図39 第4号住居址出土土器・石器実測図
図19 第2号住居址石器実測図	
図20 第3号住居址実測図	
図21 第3号住居址出土土器・石器拓影	
図22 第3号住居址出土土器・石器実測図	
図23 第3号住居址埋ガメ	

三つ塚上遺跡

I. 遺跡の概観

遺跡の立地

三つ塚上遺跡は、長野県上伊那郡宮田村狗ヶ原地蔵にあり、国鉄飯田線宮田駅の西南約2.7kmの所に所在する。遺跡の北は、中央アルブス木曾駒ヶ岳に源を発する大田切川の支流小田切川の右岸段丘上にあり調査区域の標高は702~705mを測る。大正時代頃までは、大方が山林原野が多く一部を畑地として利用していたが、昭和の初年に行われた耕地整理以後は、大方水田として利用してきた。

地質・層序

大田切扇状地は2.5~4.5%の勾配で西高東底に傾斜している。本遺跡の所在する宮田村は、木曾山脈の中程に位し、その地質構造は、領家変成岩である。岩質としては、斑状花崗閃綠岩、縞状片麻岩、中粒黒雲母花崗岩、細粒黒雲母花崗岩等の岩質からなっている。宮田村の平坦部は、これらの岩石が基盤となって洪積台地が形成されている。この台地の上部に新期ロームが1~5m堆積した地質構造である。

下図の層序は

- | | | | | | |
|----|---------|---------|----|---------|---------|
| 1層 | 10~30cm | 暗褐色の耕土層 | 2層 | 30~40cm | 黒褐色の混り層 |
| 3層 | 10~15cm | 暗黒色の土層 | 4層 | 60~75cm | 黒褐土層 |
| 5層 | 30~40cm | 褐色土層 | 6層 | 赤褐色砂礫層 | (洪積層) |

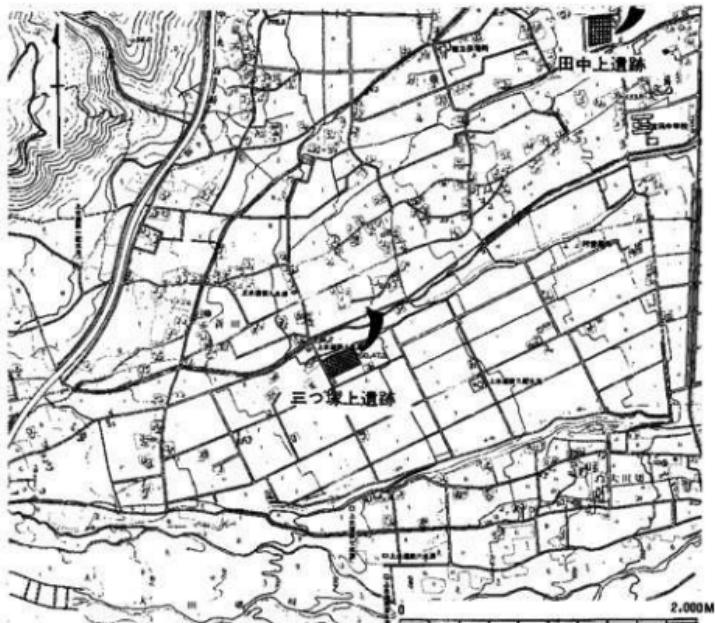


図.1 三つ塚上遺跡の位置

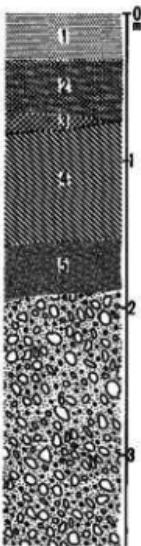


図.2 層序

II. 調査の経過

調査に至るまで

県営圃場整備事業に伴う遺跡の発掘調査も、昭和47年に開始されて以来あと1年を残して終了しようとしている。ここに発掘調査を実施した三つ塚上及び田中上遺跡は、やはり県営圃場整備事業に伴うものであり、前者は、大田切、小田切両河川間の駒ヶ原台地上の北部に東西に連なる遺跡の中で西方に位置するものであり、後者は、小田切川左岸姫宮遺跡東方小段丘上に位置する。

発掘面積は、両方で3,610m²でここ数年間中の調査では小規模のものであったが、内容的には貴重な資料を得たことは喜ばしいことである。この実施に対し村当局、村教育委員会、村文化財保護審議会、終始御指導をいただいた県教育委員会文化課、事業主体である南信土地改良事務所及び土地所有者の御理解御協力に対し心から感謝申し上げる次第である。

森下 清

調査は昭和54年7月3・4日発掘の準備を行う。

7月5日、南の田と北の田の境を流れる水路を基準にして、西より東にA~U、南から北に向って34グリッドを設定し調査を開始する。

7月6日、O P Q - 31~32グリッドに北ピットを発見。P-26-27グリッドに2号址を発見、土偶の足を検出。

7月7日、-17・-18グリッドに第1号住居址を発見、東壁にカマドを検出、北ピット、2号址の調査。

7月8日、一部作業を休む。

7月9日 1号住のカマドの附近に多くの遺物が発見される。2号址は2号住居址となる。

7月10日 1号住、北ピットは引続いて調査。3・4号住を発見。

7月11日、雨天遺物の整理。

7月12日、田中上遺跡の調査と分れて作業を行う。

7月13日、1・2・3・4号住の実測。

7月14日、4号住カマド附近の調査、田中上遺跡1号住実測。

7月15日、3・4号住の実測
田中上遺跡1号住実測。

7月16日、4号住と全測終了。

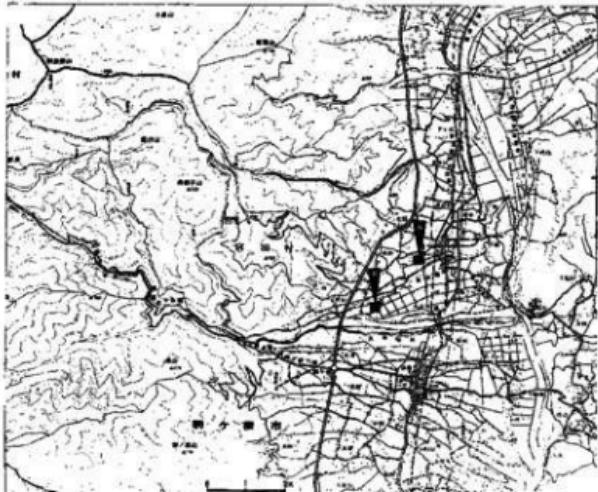


図.3 三つ塚上遺跡(2)田中上遺跡の位置

遺構の平面分布

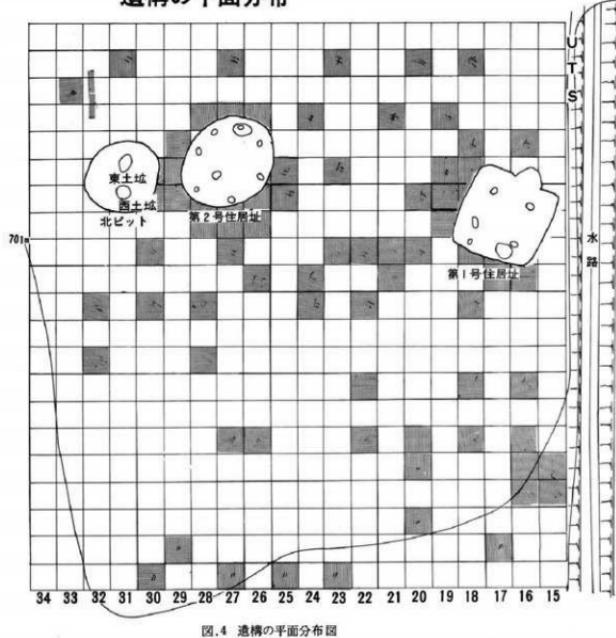


図.4 遺構の平面分布図

III. 調査の結果

1. 遺跡の概要

今回の調査地区は駒ヶ原の台地としては、北西部にあたり、東西42m、南北70m 2780m²。総計 672 グリッドを発掘調査した。この地区も昭和の初期耕地整理事業の折に、遺物の包含層が削り去られてしまい遺物の出土点数は少ない方であった。本追跡発見の遺物を見ると、縄文時代前期猪檻C式土器に始り、縄文中期・縄文後期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代にいたる遺物が出土した。調査の結果、遺構は縄文時代中期の住居址2軒、縄文時代中期のピット1基、古墳時代後期の住居址2軒が調査された。これらの遺構・遺物の分布状態から見るに、縄文時代の集落と古墳時代の集落は複合した形で東と西と南の方向に分布しているものと推測される。

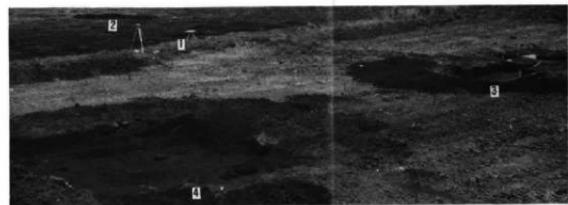


図.5 三つ塚上遺跡

2. 細文時代の遺構

第2号住居址

本住居址は、中央よりやや北東寄りO.P.Q.Rの25~29グリッドにまたがり地場下直下に落込みが発見された。覆土も黒色土とロームの混った複雑な層をなしている。壁高は現況で10~30cmを測る。床面は、黄色砂質ローム面を基盤としており、よく踏み固められているところと、そうでないところとが認められた。竪穴内ではP₁~P₆まで6本の柱穴址が確認された。中央やや西よりに約30cm人頭大の自然石で組まれた炉址があり、内部には木炭と焼土が充満していた。また、東壁に接して花崗岩の自然石を剥離した百余箇の剥片が一箇所に集められた状態で発見された。この集石を取りのぞくと、その下部はピットになっていた。集石とピットとの関係については現在のところ明かにする資料は得られなかった。本住居址は大火にあったらしく覆土及床面に木炭が多く発見された。

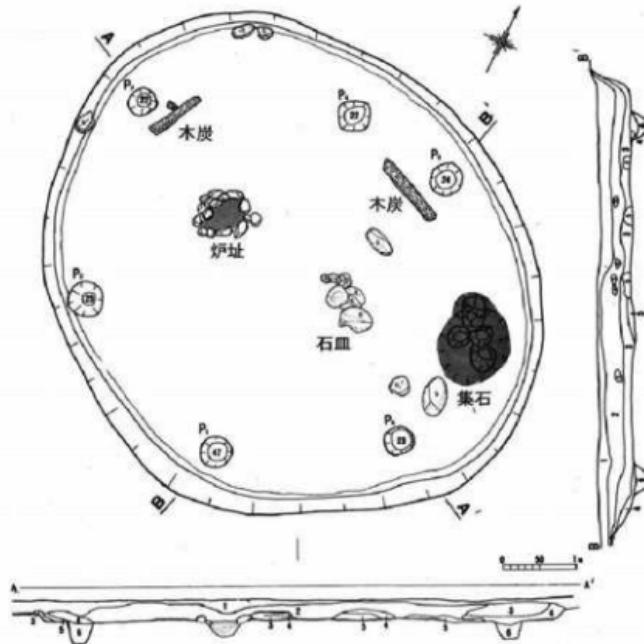


図.6 第2号住居址実測図



図.7 土器出土状況



図.8 炉址

No.	名 称
1	黒色土層
2	明るい黒色炭混り
3	褐色土混り黒土
4	黒色ローム混り
5	黒色炭混り
6	暗褐色砂質土



図.9 集 石



図.10 発掘状況

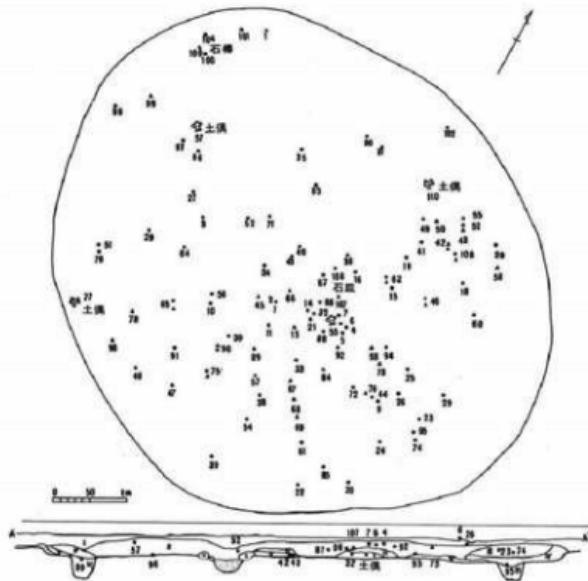


图.11 第2号住居址出土遗物分布图 (1:80)



图.12 第2号住居址



图.13 木炭出土状况



图.14 土偶出土状况



图.15 土偶出土状况



图.16 石锤出土状况

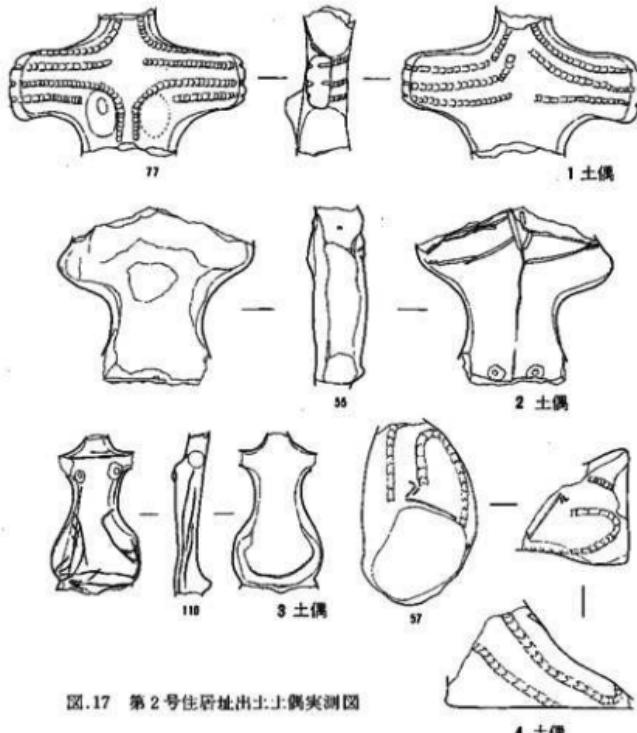


図.17 第2号住居址出土土偶実測図

遺物、出土した土器は床面、覆土を合せて75点で、(図18-1-2)は頭部の破片で不整な数条の平行波線を引き連続指痕を附加した隆帯とを続らしている土器で、平出三類Aに比定される土器である。3-4-5-6-7-8-9は藤内Ⅱ式に類似した土器と考えられ、口縁部と頭部の破片である。10は口縁部の破片であるが小片でよくわからないが曾利式の古い方かと考えられる。

図17-1-2-3-4は土偶である。1は住居址の西壁に立掛けた状態で発見された。発掘番号はNo.77である。頭部

と胸部より下を欠いたものである。両手は完存していてその巾は104mm、左側の乳を欠いている。文様は竹管状器具で押引いたもの、胸厚は20mmを測る。2.は住居址のほぼ中央の石皿の脇から発見されたものである。1.と同様頭部と胸部以下を欠いたものである。肩から胸にかけて袈裟掛状の太い波線文が描かれている。他は無文である。3.は(No.110)で、住居址の中にあっては北寄りで、木炭によりかかった状態で検出された。頭部は両手及脚部を欠いた小形の土偶である。文様は2.に類似するが、文様の位置は服部から腰にかけて施されている。4.(No-55)は住居址では西側に当る位置に発見され足の大形破片である。文様は1.の土偶とまったく同じである。

表1 第2号住居址出土石器

番号	因番番号	器種	長mm	巾mm	厚mm	重(g)	石質	完破
60	18-1	打製石斧	94	64	23	240	硬砂岩	破
104	2	石匕	131	55	12	110	硬砂岩	完
103	3	磨製石斧	125	51	39	695	綠泥片岩	完
96	4	石匕	13	29	13	60	綠泥片岩	破

石器は、覆土と床面と出土が混在するが、打製石斧、磨製石斧、縫型石匕という組織が見られる。その他実測図からもれたが石錐1箇が発見されている。

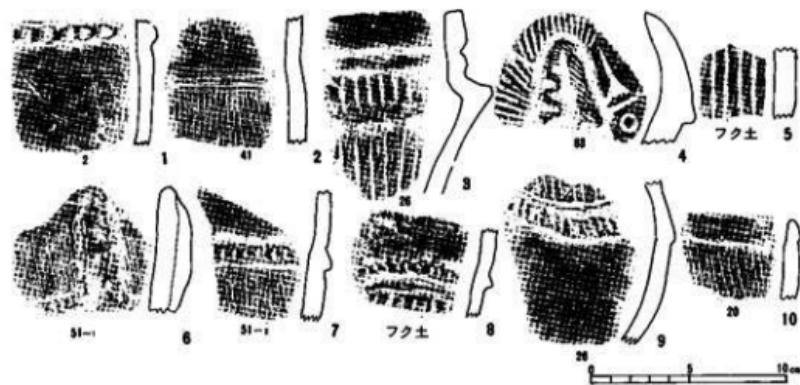


図.18 第2号住居址土器拓影

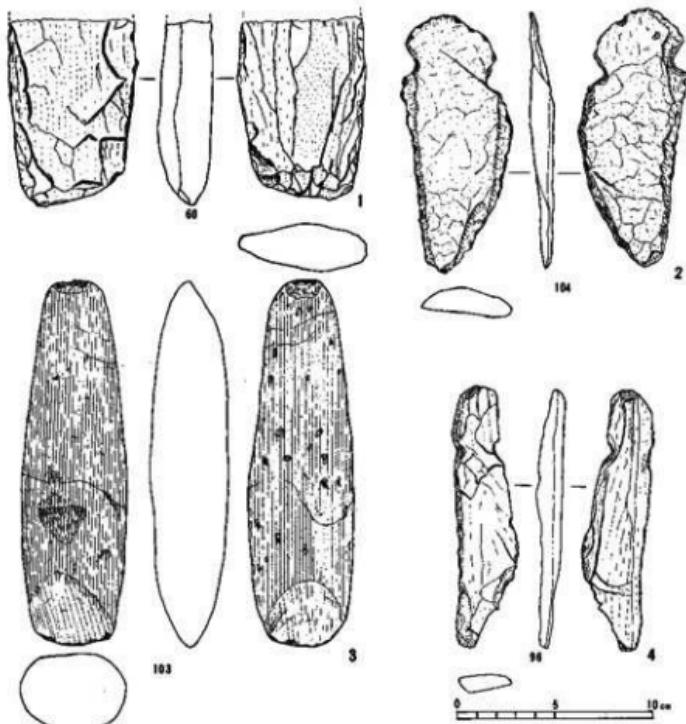


図.19 第2号住居址石器実測図 (1:3)

第3号住居址(図20)

遺構(図22) 住居址はI-J-Kの7・8

グリッドより発見された住居址である。

プランは階円形で、東辺が尖っている。

大きさは東西4.6m、南北3.4mを測る。

主軸の方向WS90°30'である。壁高はローム面より40cm掘り込まれてつくられている。

床面は西方壁附近が一部軟弱であったがその外は、かたく路固められていた。主柱4木と考えられる。他は支柱穴であろうか。炉は中央やや南寄りで底部と口縁部を欠いた甕を使用し周囲に径10cm内外の穴が四個続いている。埋戸炉の周辺は焼土が相当深いところまで認められた。壁面には内側に向いた穴が南壁に6個、北壁に5個発見された。また周溝内にも実測図に示されてある位置に12個検出さされている。

遺物(図21)

土器の出土状態は、覆土及び床面からであるが、多少の時間差がみられる。

1は變形土器の口縁部で二条の波状沈線

文が施されている土器である。平出三A

に類例をみる。2は隆帶に連続指頭痕のような文様を施し、三角の区画内に横位に竹管具により平行線でうめている。3は頸部の破片で隆帶に連続指頭痕が施され胴部は無文である。4は變形土器、口縁部上には巾広い平行波線が施され、その下には隆帶に連続指頭痕が施されている。5・6・7・8・は藤内I式に比定される土器であろう。9・10・11・12は藤内II式の類に入れられるものではなかろうか。14・15・16は1と同様平出三Aに比定される土器である。17は口縁部で藤内Iの變形土器、18は變形土器の口縁部、20は甕の底部、斜縞文で下部は無文である。18・20共に井戸尻のI式に比定されるものであろう。21は深鉢型土器の口縁部で低い隆帶に荒い爪形文が施され頭部は無文である。22は深鉢形土器の胴部破片で、縞文地に隆帶に爪形文が施されている土器で藤内の終り頃に位置付けられるものではなかろうか。23は變形土器の口縁部の薄手の破片である。隆帶、連続爪形文が施され、階円形区画内には竹管具による併行線文でうずめている。19は21と同じ土器ではなかろうか。24は後期の土器片である。

25は深鉢形土器の口縁部である。井戸尻II式に比定される土器であろう。26は深鉢形土器の底部で斜縞文が施されている土器で井戸尻期のものと思われる。埋戸炉に使用された土器、頸部以上と底部を欠く土器である。藤内の古いあたりに当るのではないかと思われる連続爪形文の施されている特殊な土器である。

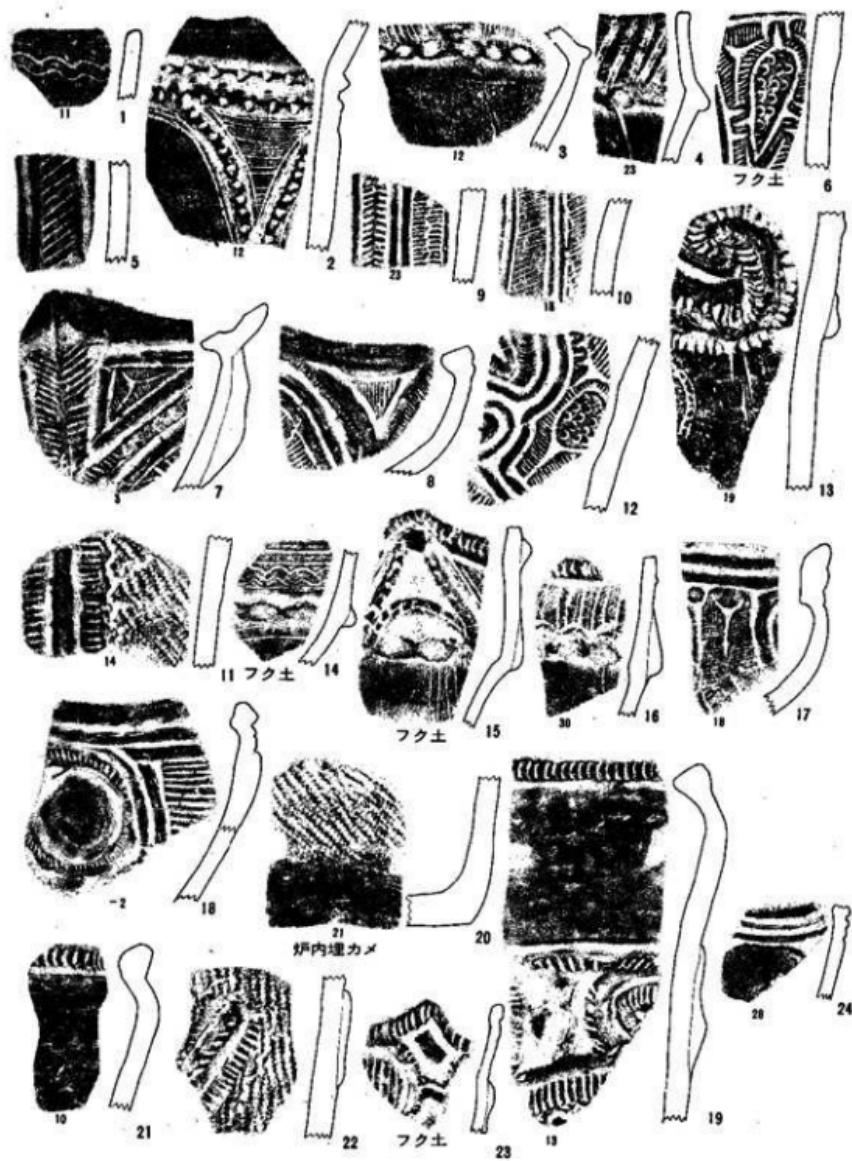


図.21 第3号住居址出土土器・石器拓影

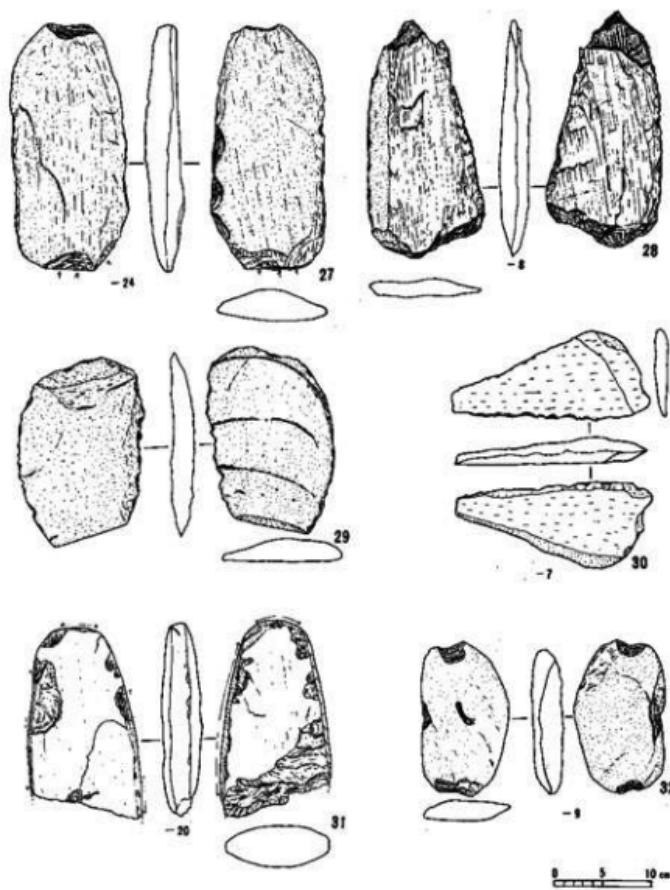


図.22 第3号住居址土器・石器実測図 (1:3)

台帳番号	固	圓版	分類	器種	材質	重さ	時代
24	22~27		石器	打製石器	片麻岩	230	縄文中期
8	~28		石器	打製石器	綠泥片岩	130	縄文中期
面上	~29		石器	橫刃	硬砂岩	100	縄文中期

台帳番号	固	圓版	分類	器種	材質	重さ	時代
7	22~30		石器	横刃	硬砂岩	60	縄文中期
20	~31		石器	磨製石斧	綠色岩	190	縄文中期
9	~32		石器	石錐	硬砂岩	90	縄文中期

北ピット

本ピットは、O・P・Q-30・31・32グリッドに発見された遺構である。プランは、東西4.9m、南北4.8m隋円形プランのピットである。この附近は後世太田切川の氾濫があったため埋没し、中層までは層位が混乱している。床面はローム層に達せず砂質土中に掘込まれて作られたものである。ピット中には東西2個の土塙が掘られ、西方の土塙は東西62cm、南北65cm、深さ15~18cmを測る。土塙内には図24-1-2-5の變形土器が東にたおれかかる状態で発見された。土塙外には遺物はほとんど検出されなかった。東土塙は、西土塙より芯々で2mの位置にあり、大きさは東西1.18、南北77cm隋円形、深さは30~34cmを測る。土塙内には図24-3・4の土器が東西から倒れかかった状態で発見された。

遺物 26図-1は西土塙から出土した口縁部と底部を欠いた變形土器である。

おそらく口頭部には隆線が結縲状の文様をなし垂下したもので、頭部下には太い隆帯を直線またはエプロン状に配し、区画内には平行の沈線文で溝し、胴部下は無文で器面は研磨され黒褐色を帶胎土は無い。

曾利I式に指定されるものであろう。2は1と同様の出土状態で出土した。胴部以下の破片である。縦位または唐草文的の隆線に刻目を附し隆線と隆線との間は横位に平行沈線で底部までうずめている。色調は赤褐色で無い土器で曾利I式に比定し得るものと思う。

5は1・2と同様の状態で出土した土器である。口縁

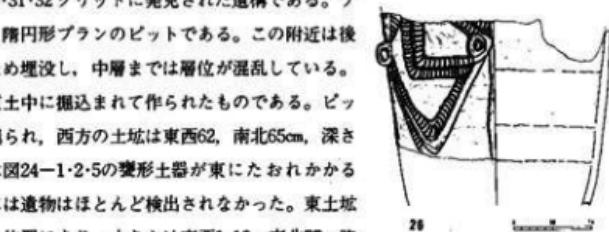


図.23 第3号住居址埋ガメ

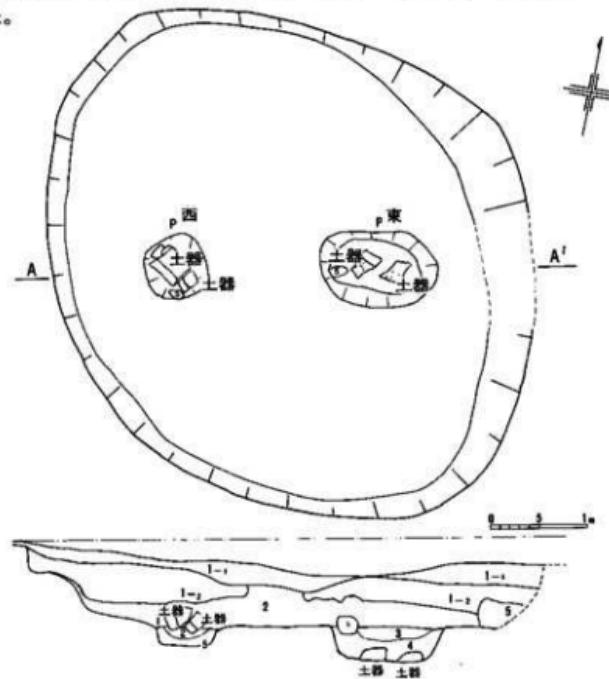


図.24 北ピット 凡例

No.	名 称	3	灰 色 砂 土
1	砂混り黒色土	4	灰褐色土層
2	砂混り黒褐色土	5	黑 土 層 落込

部が開口し口唇端がわずかに内弯する。頭部に平行して3つの隆帯を続らし胴部の4箇所に2本の連続爪形文を配した隆線が垂下する。その間を竹管具による平行沈線文でうめている。この土器も1・2と同様の時期のものであろう。

東土坡出土土器、3は胴部で口縁と底部を欠いている土器である。文様は5と同様のものであろう。内部は煮沸したと思われる黒炭の焦けが附着している。4は3と同様な出土状態である。口縁は無文頸部以下に4本の無文の隆帯が垂下し、その間に篦描の縦と横位の沈線文で溝している。唐草系の曾利I式に類例を見る。



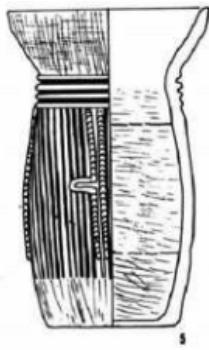
図.27 西土坡



図.25 北ピット



図.28 東土坡



北ピット西土坡出土

図.26 北ピット出土土器実測図 (1:3)

3. 古墳時代の遺構

第1号住居址 (図29・30)

本住居址は、M・N・O・P-15~19グリッドに発見された住居址である。プランは方形で大きさは東西6.4m、南北6.5mを測る。開田時にロームの一部を削られているため壁面ははっきりしないところがある。現在壁高は20~25cm立ち上りはゆるやかである。床面はタタキが良く行われ良好である。壁下には巾の狭い浅い周溝がみられる。柱穴は4本でP₁は東西床面で30cm、南北60cm、深さ63cm底部の南北22cm、東西14cm隋円形底は丸い。P₂は床面で東西56cm南北38cm、底面で東西25cm南北14cmの方形底は平である。この柱穴のみが東西に位置している。この事実は建築上重要な問題となろう。P₃は、東西35cm、南北52cm、深さ40cm底面、東西12cm、南北20cm長方形、底は平らである。P₄は床面上で東西30cm、南北56cm、深さ65cm、底平は東西14cm、南北25cm隅丸方形、底は平らである。住居址の西壁に接して土塙が発見された。大きさは東西1.03m、南北1.55m、深さ70cm、隋円形。土塙内に口縁部を北に向って倒れかかった形でカメ形土器が検出された。(図18)

竈は東壁やや北寄りにあり、一応の石芯粘土造りである。壁への扶り込みは15°~20°の角度で、煙道部をU字状に掘り込んでいる。火床面は50×40cmエプロン状に掘られていて、

煙道部は特別の施設はない。袖石を芯に粘土でかたためて作った竈である。竈の右側には良好な土器のセットが発見されている。

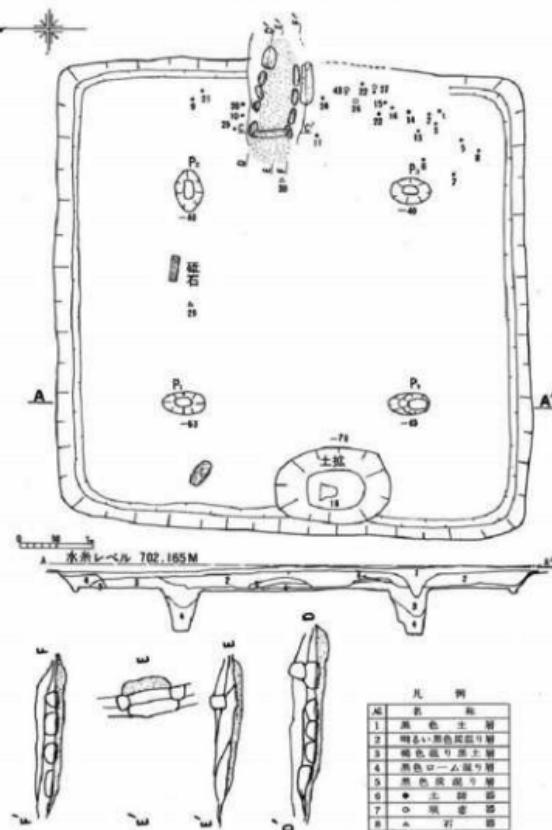


図.29 第1号住居址実測図 (1:4)



図.30 第1号住居址



カマド右側遺物出土状況 1



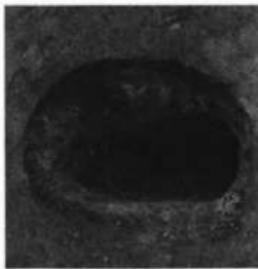
遺物出土状況 2



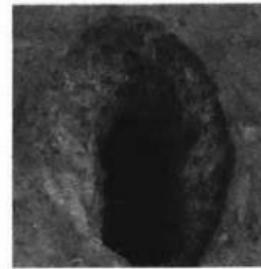
カマド・右側遺物出土状況 3



カマド北側遺物出土状況 4



柱穴 P₂



柱穴 P₁

図.31 第1号住居址、遺構、遺物出土状況

遺物 (図32・33)

出土した遺物は、土器、須恵器類、石器である。土師器が主体で須恵器はわずか3点にすぎなかった。

1～3は土師の杯形土器である。口縁部がわずかに外反し窓でないに調整された内黒磨削の土器である。4は3分の1ほどの破片である。器面内外とも窓削内黒色土碗形の土器である。5は3分の一ほどの破片からの図上復原である。胎土は砂粒をわずかに含み赤褐色に焼かれている。口縁部は外反し口縁は窓で横削りの調整の碗形土器である。6.は2分の一弱の破片で図上復原である器壁は内外共窓削、口縁部は横ナデがわずかに窓われる。7は2分の一ほどの土器で図上復原である。口縁部は6と同様外反する、底部はやや厚目。整形は器壁内外共窓削りである。色調は暗褐色、胎土に砂粒を含ず、碗形土器である。8は、内黒磨の高杯、杯部3分の一程の破片である。杯の縁は認められない。脚部を欠くので全体の形態を知ることができないのが残念である。9は3分の一ほどの碗形土器の破片の図上復原である。内黒磨外壁は窓削りの土器である。10は内外面窓調整による碗形土器である。11は、口縁部が内窓した内黒磨の浅鉢と思われる土器である。内外共窓削調整が窓われる。

12は、3分の2ほどの図上復原の土器である。口縁部が外反し、器内外は窓削がわからないほどに整形された薄手の窓い土器である。色調は赤褐色、胎土に石英粒を含む。13は、

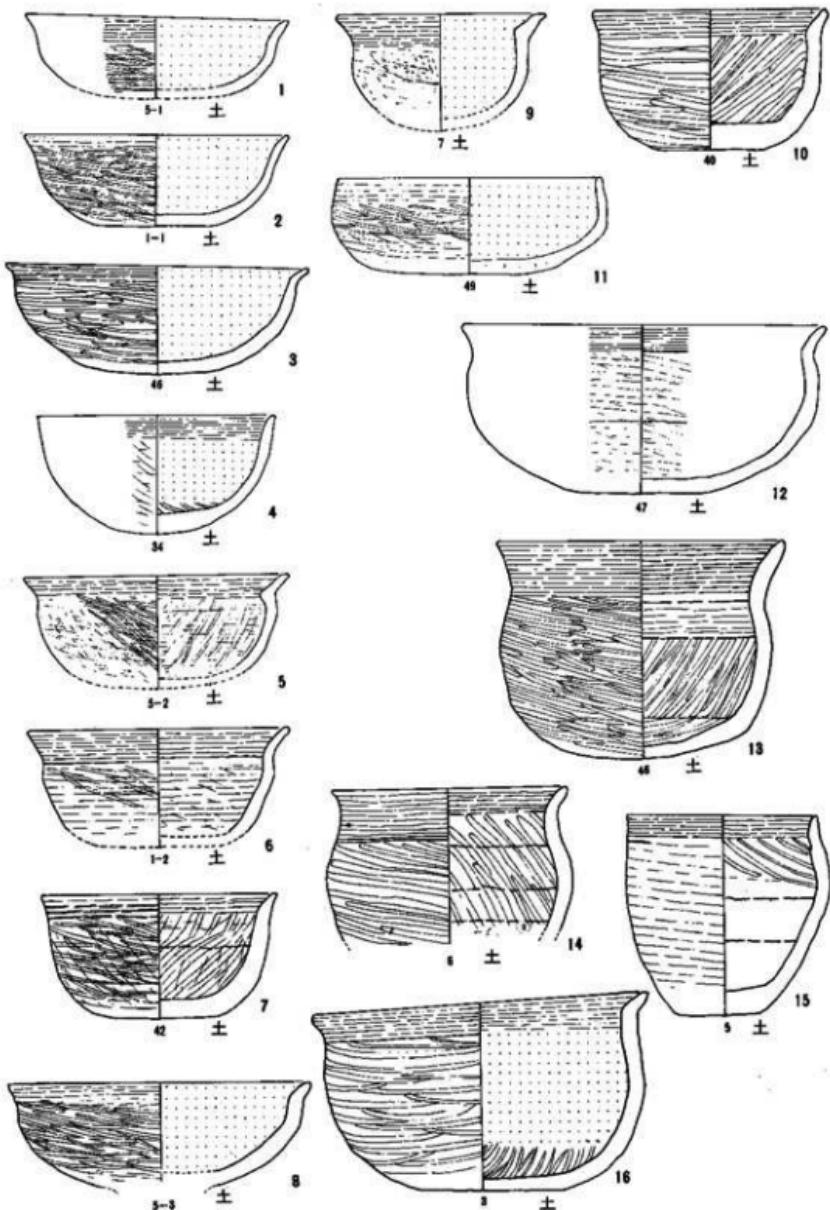


図.32 第1号住居址出土土器実測図 (1:3)

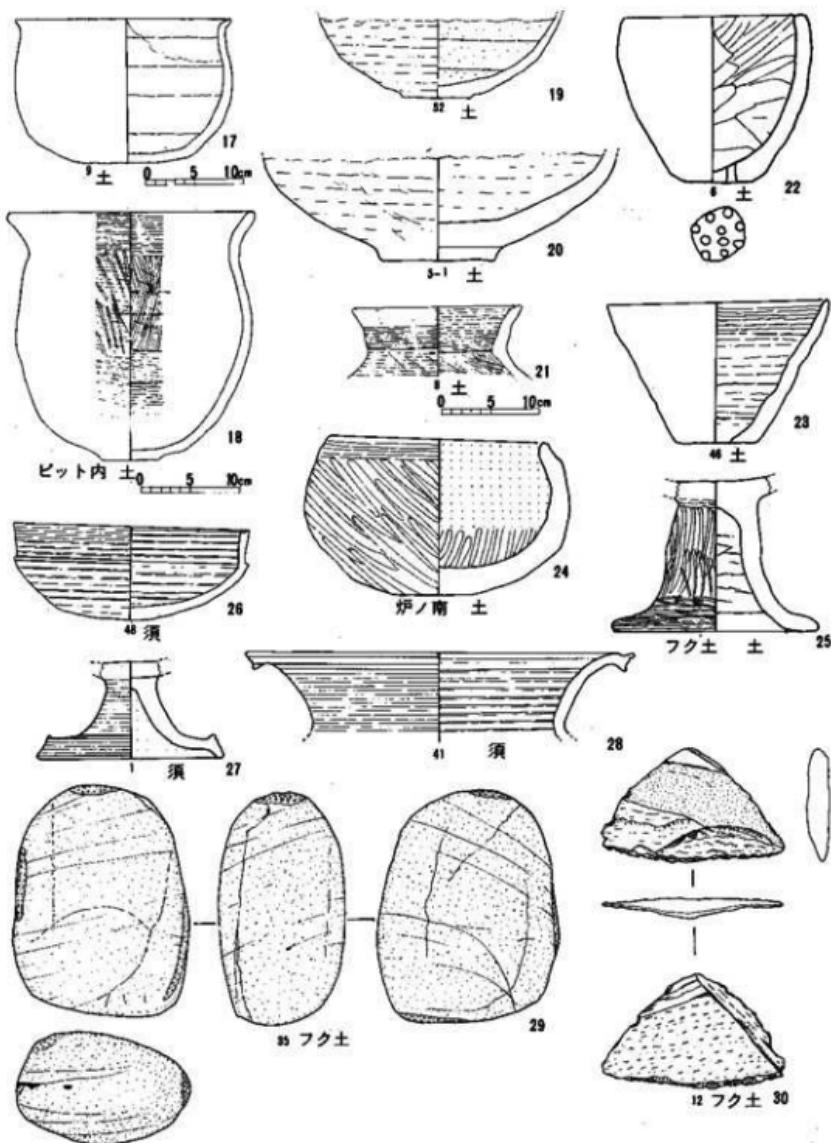


図.33 第1号住居址出土土器・石器実測図 (1:3)

一部を欠く鉢形土器である。口縁部はゆるやかに外反、口唇はやや尖る。器内外は範削痕をわからないほどに整形した土器である。色調は赤褐色胎土に砂粒を含む。14は13と同様であるが、底部を欠いている土器である。15は、小形の壺形土器である。口縁部は外反し胴部に最大径をもつ、輪積の痕が明瞭に残われる。色調は赤褐色。外面の一部に黒煙が附着しているのが見受けられる。器面の整形は範削と思われるがその痕跡を止める程に整形された土器である。16は、口縁部が外反した内黒窓の鉢形土器である。17は、口縁部が小さく口唇に近いところで外反した鉢形土器である。18は住居址の西壁に接し位置に発見され、土塊の底部に横倒になった状態で出土した變形土器である。口縁部が緩やかに外反し、胴がやや張り目気味小形の底部をもつ土器である。内外面は範削、口縁部は範削の上を横ナデの整形、色調は赤褐色厚目のやや脆い土器である。19・20は胴部以上を欠いた變形土器の破片である。21は變形土器の口縁部破片で図上復原したものである。18と同様の變形土器と思われる。22は壺で内外共範削り、高さ9.5cm、口径9cm底部に外から内に向かって4~5mmの穴が穿たれている。色調は赤褐色焼成は良好である。23は壺と考えられる土器である。高さは7.2cm、口径は11.2cm、底部は外側から開けた直径1.8~1.9cmの穴が穿たれている土器。器面は範削の痕が認められる。24は、口縁部が内弯した内黒窓削り略完形に近い土器である。25は高杯の脚部である。脚の中間部がやや張らむ。脚の底部は内側から外に向って範で削りとっている。整形は継の範削りが行われている。26は須恵器杯の蓋である。天井部は比較的平につくり、TK208の蓋Aのおもかげをわずかにこしている。削りの方向は逆まわりである。27は26と同じく須恵器の高杯の脚部である。わりと小形無窓の高杯脚部の破片である。脚の形態は陶色209の脚部先端に例を見る。28は須恵器の壁の口縁部3分の一ぐらいいの破片の図上復原である。薄手の丁寧の作りである。口縁部の反りは陶邑II期末の變形に類似を見る。29は緑色岩の磨石で重さ1.15kg、端部に叩いた痕跡が認められる。30は硬砂岩の横刃形石器である。以上の結果より6世紀後半~7世紀の極初めに位置される住居址であろう。

第4号住居址 (図34)

本住居址は、A~Cの6~10グリッドに発見された住居址である。プランは東西6.70、南北6.25m、隅丸方形の竪穴式住居址である。壁高は20~30cmを測る。床面はやや凹凸があるが全体的には団くたたきしめられ良好である。住居址中央スクリントを貼付してある個所は、本住居址を作る以前の土塊で、これを埋めて貼床とし使用している。P₁の東側の一部分を除いて幅10~15cm内外の浅い周溝がめぐらされている。住居址の主軸方向はS-87度Wである。支柱穴はP₁・P₂・P₃ P₄の4穴であるが、P₁の東P₅、P₂の西P₆、P₄の西P₇は、柱穴としての規則性にけているところより、支柱とも考えら

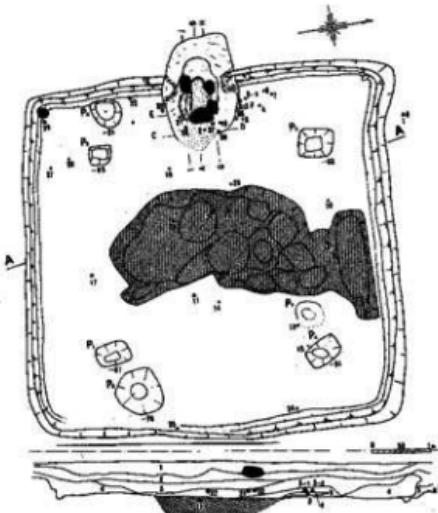


図34 第4号住居址実測図

れる柱穴である。柱穴の形態は P₁ の底部は南北向の 25×10cm 長方形、P₂ は 25×15 の梯形底、P₃ は南北向の 24×20cm 長方形の底、P₄ は同じ南北方向のむきであるが 27×16cm 隅円形である。

竈 は西壁ほぼ中央にあり、壁を 30~40cm ほど 23 度の角度で扶り煙道部を作っている。石芯作りである。火床面の掘込は 10~15cm 内外、袖部は大形の石を使って組み、その上部に平盤な石をのせている。袖石の固めには黒色土とロームの混合した粘性の強い土で作り上げている。遺物は主に炉の附近に集中して発見された。

遺物 1 台帳番号 13 は P₂ の南床面上から発見された遺物である。口径 14, 高さ 5.5cm 口縁部が外反した内黒施削の杯形土器である。器面の整形はごくていねいに箇磨されている。色調は赤褐色、胎土は砂粘を含む。2 は台帳番号 21 で出土位置は P₆ 柱穴のふちに傾斜して発見された。口径は 23.7, 高さ 6.0cm やや深い杯形土器である。内面は黒焼で黒色を帯びている。器面は輪積の痕が認められ施削の整形は凹凸が多い。器色は赤褐色、胎土は砂粒を含んで艶い。3 は台帳番号 22 でカマドの南周溝に接して発見された土師の碗形土器である。4 は台帳番号 5 でカマドの北床面上に検出した小形の斐形土器の図上復原である。5 は碗形土器の底部の破片である。6 は胴の張った斐形土器の破片である。7 は打製石斧、片麻岩重さ 250g、8 は黒雲母花崗岩の投弾と云うべきもの、重さ 470g。

凡 例

名 称
I 黒 土 層
II 黑褐色土層
III 暗褐色土層
IV 褐色土層 1
V 褐色土層 2
● 土 師 器
▲ 石 器

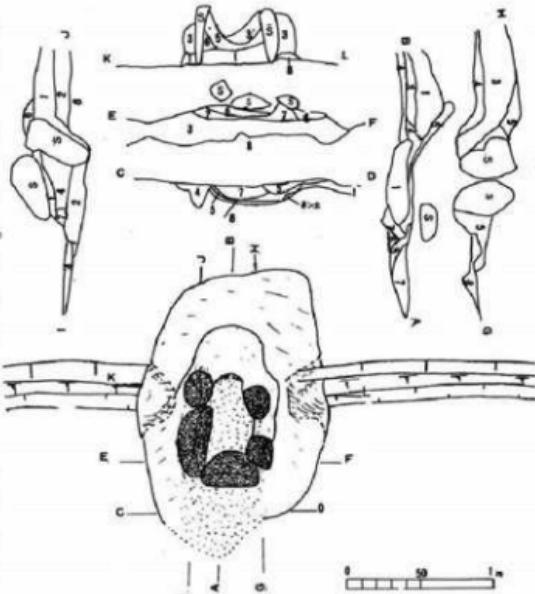


図.35 第4号住のカマド



図.36 第4号住居址



図.37 第4号住カマド

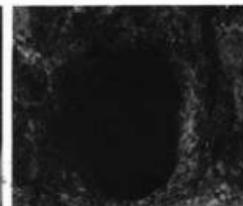


図.38 第4号住柱穴

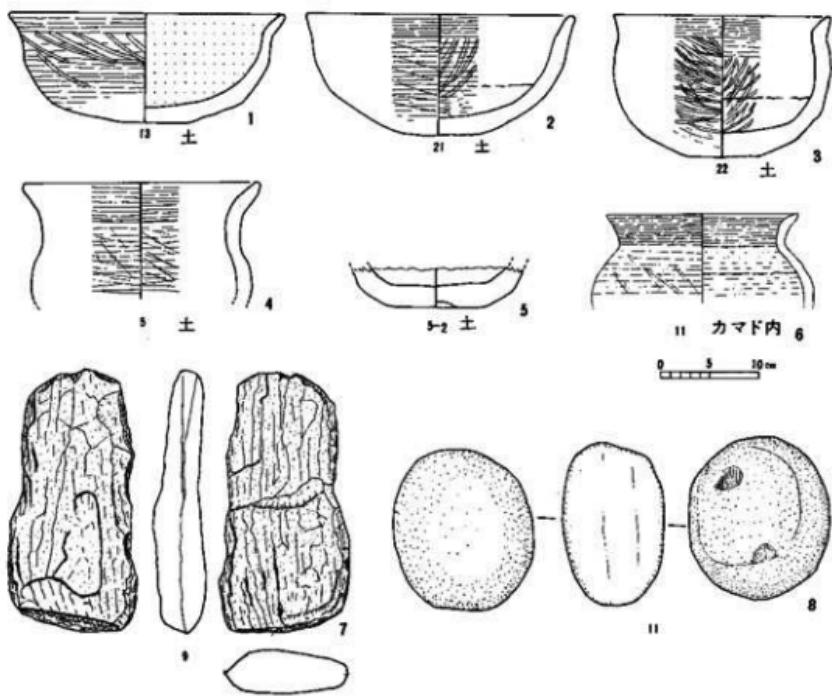
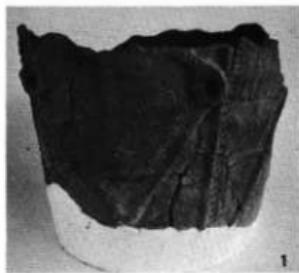


図.39 第4号住居址出土土器・石器実測図



1. 3号住理カメ 2. 北ピット西土塙 3. 北ピット 4. 1号住ピット内
5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12 1号住居址出土

4. その他の遺構

D-E-F—15~16グリッドに、縄文中期及び後期の遺物が地場下底下から出土したので、調査を行ったが、開田当時土場下まで削られたらしく遺構は発見できなかった。L-M—21~22グリッドに縄文中期の土器が集中して発見されたが、ここもやはり地場下迄削られたらしく遺構を確認できなかつた。U—30グリッドの東に盛り上げられた廃土中より丸山指導主事が1片だけであったが縄文前期の諸磯Cの破片を採集された。

おそらく、昭和初年の開田工事の折遺構も破壊されたものであろう。M-N—27グリッドに縄文中期の土器が集中して発見されたので調査を行つたところ、土層が黒土中のため遺構の確認はできなかつた。第4号住居址の北側よりロムマウンドが発見されたが、ついに完掘することができずに終わってしまった。

IV. 所 見

1. 本遺跡は、駒ヶ原東・駒ヶ原下・カラス林遺跡・カラス林古墳・三つ塚遺跡・三つ塚古墳群、と小田切川石岸段丘上に連なる一連の遺跡の一つである。また、本遺跡の西にもニッ屋遺跡が認められているところから、おそらく、小田切川石岸段丘端まで遺跡は分布しているものと考えられる。

2. 駒ヶ原の台地では今まで上師器の破片は発見されていたが、住居址が確認されたことは今度が初めてである。今迄研究者の間での考え方としては、古墳が築造される台地であるから、当時の集落は小田切川石岸のみにあるのではないかと言う観測が有力であった。しかし、今度の調査でこの考えを改めなければならないことになった。

3. 第2号住居址より発見された4個の土偶は、一つのセットとして考えるうえ貴重な資料となろう。

4. 本遺跡発見の縄文中期遺構・遺物は、宮田村としては古い方に属するもので、宮田村における縄文時代の編年上重要な位置をしめることとなった。

5. 本遺跡の縄文時代の集落は南から西の方向に分布されているものと思われる。土師の集落も縄文時代の集落の有方と同様ではなかろうか。

6. 遺物の整理中に発見されたものであるので出土状態は残念ながら不明であるが、薄手の無文土器が1片存在することが確認された。おそらく、縄文前期中越式2群に属する土器と思われる。これで駒ヶ原台地の縄文前期初頭の遺跡は、駒ヶ原南・大原・駒ヶ原下、と4個所を数えることとなったことは、縄文時代前期の研究に大きなプラスとなることであろう。

7. 第1号住居址のカマド附近から発見された多くの遺物は、一つのセットとして取らえる上で貴重な資料となつた。

本遺跡の調査に當り、村当局をはじめ、南信土地改良事務所、県教育委員会文化課 丸山・関 両指導主事上伊那考古学会員の諸氏、地主の方々の深い御理解と御支援を心より感謝申し上げる次第である。

註 1. 藤森栄一 井戸尻

2. 平出遺跡調査会 平出

3. 講談社日本原始美術縄文土器(1) 小林達雄

4. 中央道埋蔵文化財調査報告書46 飯島田(その1)

5. 宮田村教育委員会、駒ヶ原南 1977

6. 宮田村教育委員会、松戸 1976

田中上遺跡



図1 田中上遺跡

目 次

I. 遺跡の概観	2
遺跡の位置	2
地形・層序	2
II. 調査の経過	3
III. 調査の結果	3
第1号住居址	3
第2号住居址	4
IV. 所見	6
図1 田中上遺跡の位置	
図2 田中上遺跡調査坑分布図	
図3 層序	
図4 第1号住居址実測図	
図5 第1号住居址遺物分布図	
図6 第2号住居址実測図	
図7 田中上遺跡出土の遺物	
図8 第1号住居址出土鉄斧	



- 田中附近の遺跡
 1.田中北 2.向山 3.田中東 4.田中西 5.田中上
 6.田中南 7.姫宮遺跡

I. 遺跡の概観

位 置

田中上遺跡は、長野県上伊那郡宮田村南割田中地籍に所在する。

遺跡は宮田村のほぼ中央に位置しており、伊那谷特有の河岸段丘上に分布する。遺跡に至るには、国鉄飯田線宮田駅で下車し、鉄道沿に南へ100m、小田切川左岸段丘上にそって300m西に歩く、また、国道153号線からは西方へ500mほどの所である。

地形・層序

宮田村は、太田切川によって作られた太田切扇状地と、西山麓地帯の過疎堆積地帯からなっている。田中上遺跡は一般的にいう太田切扇状地帯に属している。そのうち、本遺跡の所在する所は、扇状地が造成される時、特種の作用で作られると云われている小段丘である。こうした現象は地質学的には定説はないようである。段丘の平均比高は12m、傾斜勾配は8%を測る。宮田村の平坦部の勾配は平均2.5~4.5%であるに比して、一段と急勾配をなしでいる。

太田切扇状地は前に述べた勾配で西高東底に傾斜している。この台地を形成している地質は、木曾山脈の岩質で組成されていることは、伊那谷の洪積層を考える上に注意しなければならないことの一つである。地質構造は、縞状片麻岩・黒雲母花崗岩・白雲母花崗岩・ホルンヘルスリ等が母体となって組成されこの上に1~5mの新期ロームが堆積したのが、その地質構造である。



図2 田中上遺跡調査坑分布図

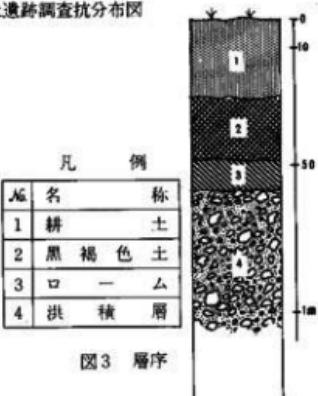


図3 層序

II. 調査の経過

田中上遺跡は大正年間骨松の工場が造られた頃、附近にあった石經塚が破壊され刀・甲冑などが出土した。これ等の遺物は湯沢氏の墓地に移したことから注目されるにいたった。

昭和の初め福村清治氏が自宅の裏の畠を深耕作業中、縄文中期の甕、石圓炉址、土師器、須恵器、灰軸等が発見されているところより、縄文中期、古墳時代、奈良時代、平安時代の複合遺跡であることが確認された。

昭和50年度圃場整備に伴う姫宮遺跡の周辺調査で指導をおねがいした、東山道の研究の権威一志茂樹博士は、古社姫宮神社が近くにあり、宮田と云う地名も附近にあることから、田中上周辺に東山道宮田の駅がある可能性があると指摘されたこともあって、今回の調査が行われることになったのである。

調査は7月12~14日と8月20~22日までと二回にわたり実施された。その結果、古墳時代~奈良時代の住居址2軒が発見された。

III. 調査の結果

第1号住居址

遺構 (図4・5)

本住居址は試掘35号坑に発見された遺構で、プランは東西3.6m、南北4.2mを測る隅丸長方形の住居址である。壁外に西から北に平均1.4m間隔に8つの柱穴が設けられている。柱穴の大きさは、平均25cm内外で、深さは12~29cm P 8を除くと、あとは直穴である。東側と南側にも西北の壁外同様な柱穴が設けられていたものと思われる。これ等の壁外柱穴は、母屋柱址と考えられる。壁には2~3の小穴が認められる。周溝は北西の一部を除いて設けられ幅7~15cm内外、深さも5~7cmを測る。周溝内に径5~10cm内外の

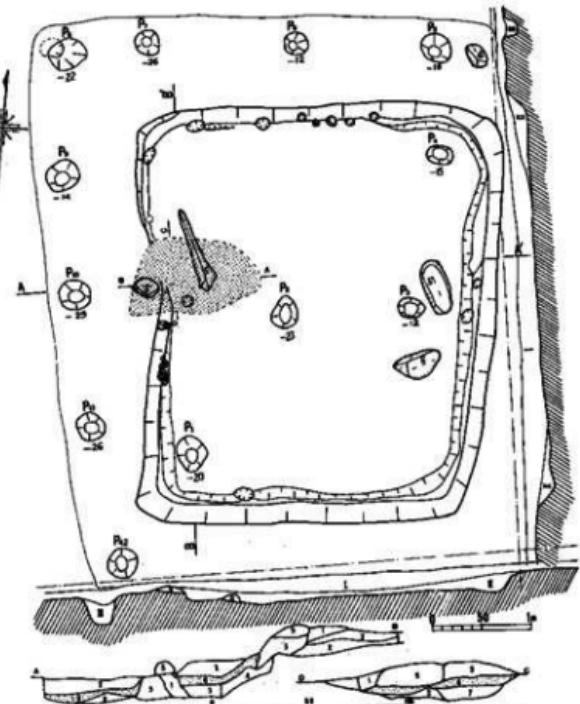


図4 第1号住居址実測図 (1:60)

A6	名 称
1	黒 土
2	黒 福 色 土
3	赤 福 色 土
4	砂 質 黒 土
5	ローム 層
6	燒 土
7	黒褐色ローム 層

小穴が8個検出された。壁はややゆるやかで壁高は15~20cmを測る。主軸の方向はN 93°30'Wである。床面は中央より西半分は平坦で固いが、東側は凹凸があり東南の方向にわずか傾斜している。

柱穴は、P₁・P₃・P₄の3本は柱穴として認められるが、他は検出されなかった。

窓は西壁やや北寄りにあり、一応石芯粘土造りである。壁の快り込みは浅い。煙道部と袖石はほとんど失なっている。焼土は燃焼部外にひろがっている。

遺物（図7・8）

遺物の出土状況は、遺物分布図に示されているように総数13点である。そのうち2・3・4・5・7・8・12・17は覆土中からは6・9・10・16の4点は床面上から発見された。土器はすべて無文の小破片である。

鉄斧、発掘番号No.6で刃部を南に向け床面上に平に置かれた状態で発見された。住居址から検出された例は、駒ヶ根市原垣外遺跡第36号住居址から発見されている。現在上伊那では住居址から発見された例は、これで2例となった。本住居址からは灰釉陶器は発見されなかった。時期的には奈良時代と考えている。

第2号住居址（図6）

本址は1号住の南8mに発見されたもので、プランは東西3.7m、南北3.6m。主軸はN W 174度。壁はなだらかである壁高は15~20cm内外、床面は小石が多く凹凸全体に軟弱である。

柱穴は4住穴P₁~P₄、Psは支柱穴であろう。

窓は南壁ほぼ中央にあり、石芯粘土窓と推定されるが、ほとんど破壊されて計測はできない。石はほとんど火を受けている。

遺物（図7）

1・2・3は土師の菱形土器の破片である。文様は継位ハケ目である。3は小形の砥石の破片、4・5は須恵器の壺形か菱形の破片と思われる。時期的には、第1号住よりやや後出であろう。

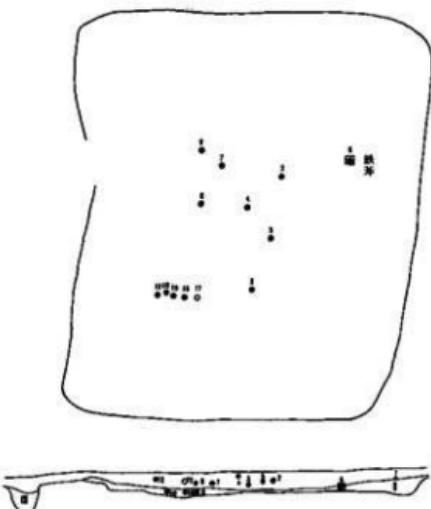


図5 第1号住居址遺物分布図（1:60）

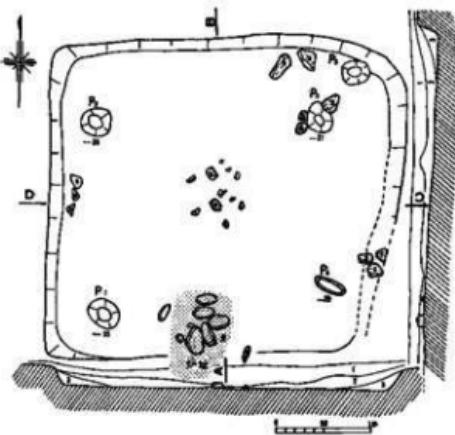
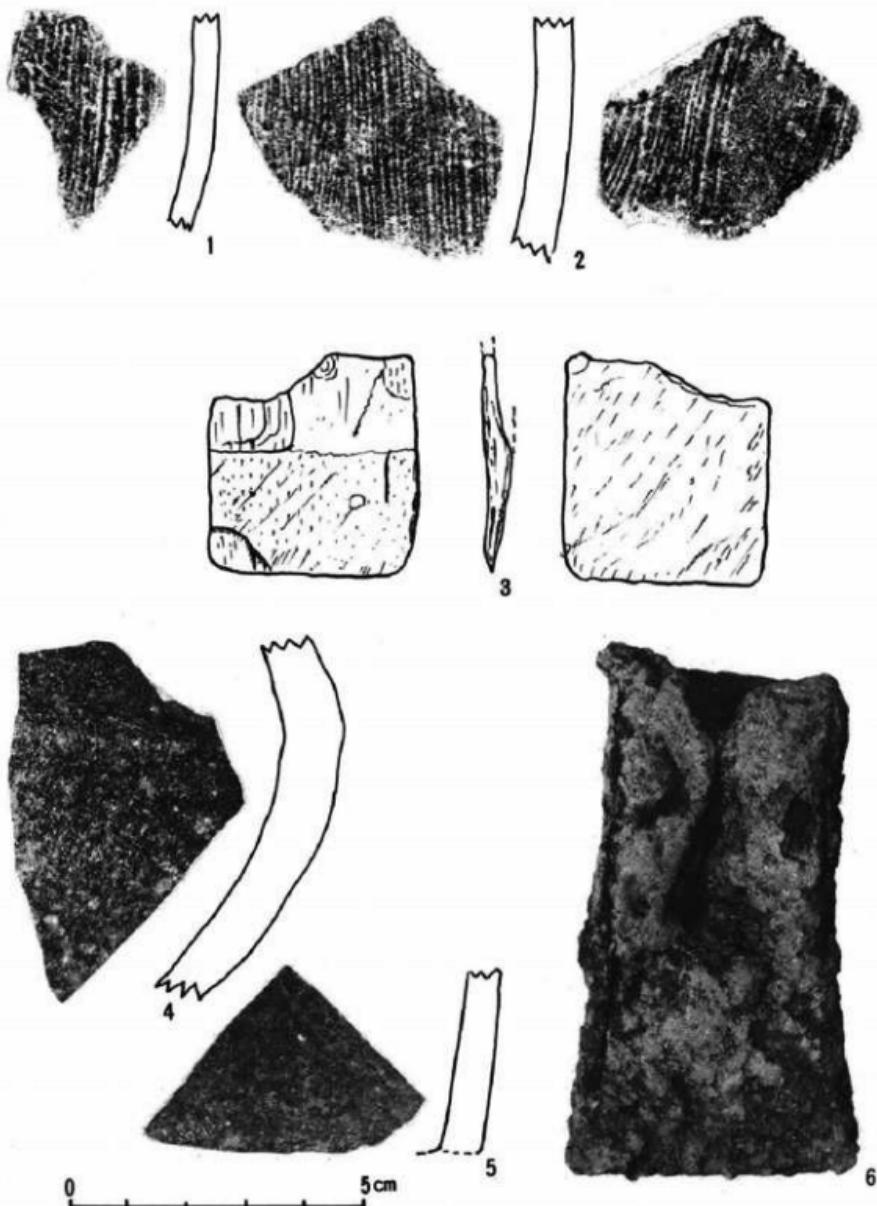


図6 第2号住居址実測図
(1:60)

凡 例

No.	名 称
1	黒色土層
2	黒褐色土層
3	赤褐色土層



1.2.—第2号住居址(上部器) 3.砾石、第2号住居址 4.5.須恵器 6.第1号住居址、鉄斧

図7 田中上遺跡出土の遺物

IV. 所 見

1. 遺跡の所在する田中は、宮田村のうちでは中央に位置している。この田中という地名はどのようにして付けられたかは詳かでないが、なにか古代農村への遠かな香が漂っている感が深い地名である。この田中地籍は南北700m、東西400m田中小段丘上下にひろがっている地籍である。集落は南北を貫く古道をはさんで東西に分布している。この地籍には縄文時代草早期、早期、前期、中期、弥生時代復合遺跡である。向山遺跡、縄文早期押型文土器を出土する田中東遺跡、縄文中期、奈良・平安時代の田中北遺跡、平安時代の住居址が発見された。田中南遺跡は押型文土器が出土。田中部落には重要な遺跡が多く所在する。また、この地籍全体からは奈良・平安から中世にいたる古陶器を出土することなど最近の調査で確認され、現在小木曾清氏を中心に分布図を作成中である。とにかく、田中地籍はこれらの遺跡群に包含されていて宮田村の中世の宝庫といえる地域である。

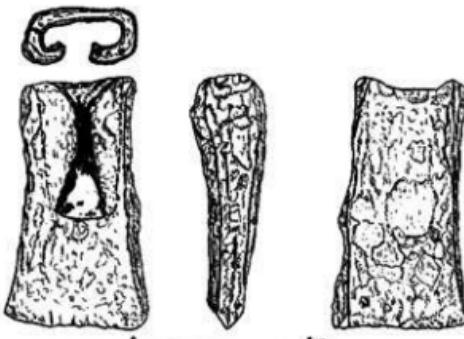


図8 第1号住居址出土鉄斧

2. 「東山道」の宮田の駅が置かれたと考えられる遺跡。今回行われた調査では、直接駅址に關係のある遺構や遺物は発見できなかったが、奈良時代～平安時代にかけての住居址2軒を調査することができた。そのうち、第1号住居址からは鉄斧が発見された。この鉄斧をめぐっての考え方としては、鉄斧と權力者との関係を追求することが重要な課題となろう。このことについて深いかかわりをもつていると考える姫宮遺跡が本遺跡の西に続いている。この姫宮遺跡は弥生式後期前半の住居址を30軒も発見した大集落である。また、それに続いて姫宮附近には古墳時代の集落が存在することも確認されている。姫宮遺跡に続いて実庵遺跡がある。この実庵は（ミヤダ）とも読めると一志茂樹博士は述べられている。とにかく、弥生時代～古墳時代にかけ古い氏族の祀つた氏神が姫宮神社だと考えるのはどうか。また、姫宮附近には宇宮田・宮ノ田、平安時代によくつかわれる在家等の地名等が集中しているところより、「東山道宮田の駅」の名も付けられたものではなかろうか。弥生時代にその基盤を確立した古代氏族は古墳時代になって三つ塚古墳、カラス林古墳群を築造した氏族と考えられる。それがやがて奈良時代・平安時代の「宮田の駅」を支えた支配者につながっていると想像はできないものであろうか。宮田の歴史を追求して行くなかで、「東山道宮田の駅」の占めている役割は大きいと思う。今回の調査に御協力をいただいた、向山雅重先生・川手鐵治郎・福村佐門・城倉忠雄・一志茂樹先生・宮田小学校有賀千鶴・畠谷雅美両先生、小学校郷土クラブの皆さんに対し心から御礼を申し上げる次第である。

(友野 良一)

三つ塚上・田中上遺跡

発掘調査報告書

昭和55年3月15日 印刷

昭和55年3月18日 発行

発行所 長野県上伊那郡宮田村
教育委員会

印刷所 長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町
織才ノウエイ印刷

